

デリーを離れぬ女性作中人物たち

——クシュワント・シンの『デリー』——

梅 正 行

一八五七年

ジェイン・オースティン、エリザベス・ギヤスケル、ジョージ・エリオット、チャールズ・ディケンズあたりから始め、イギリス小説カノン対象の読書経験を積み、「イングリッシュユネス」とは何かという問いに、その問いの漠たる程度に見合ったほどの、これまた漠たる答えのひとつふたつも出せる読者であれば、インドの英語小説と呼ばれ、また一見、そうとも見えるクシュワント・シンの『デリー』（一九八九年）の目次に、ティムールやアウラングゼーブやナデール・シャーや詩人ミール・ターキ・ミールの名とともに「一八五七年」という章題を見出すや、また、この第六章「一八五七年」が不釣合いに全体の五分の一の長さであることを確認するや、ここに作品のクライマックスがおかれていると即断の上、手持ちの知識で観賞できようとのい

われなき期待を抱くことは大いにありえよう¹⁾。さらに、その読者がチャールズ・ディケンズに加えジェイムズ・ジョイスやヴァージニア・ウルフの愛読者であれば、『デリー』をヨーロッパ近代都市小説のインド版と早合点し、ある種の先入観をもって、頁を繰り始めるかもしれない。ディケンズのロンドン、シンのデリーという具合に。

そして、二十世紀後半以降に隆盛を見たインドの英語小説の傑作について、たとえばヴィクラム・セート（一九五二）の『婿選び』（一九九三年）はミドルマーチならぬインドの架空の都市プランプールの大学英文科に籍をおくラタという娘が三人の求婚者の誰と結ばれるかということテーマとするオースティンのともエリオットのとも形容可能なインド版風俗小説であり、ロヒントン・ミストリー（一九五二）の『絶妙のバランス』（一九九五年）やアマタヴ・ゴシシュ（一九五六）の『ガラスの宮殿』（二〇〇〇年）がディケンズの集団描写の妙を各所に配した作品であるということを知っている読者で

あれば、飛躍の誇りを覚悟で言えば、F・R・リーヴィス風の伝統が現代インドに息づいていることを確認しながら作品を読むという行為の延長上にシンの作品をおいてみようとし、そこにいたるまでの五分の三のデリーをめぐる攻防の数々の後に、奇妙な話ではあるが、ある種の「イングリッシュユネス」の登場を期待するかもしれない²⁾。ところが、「一八五七年」と題する第十六章は、他の章が読者に喚起する複雑多岐にわたる興奮に比して、ホメロスもときに居眠りをするとの言葉を連想しかねぬほど退屈だ。読者は肩すかしをくう。なぜか。

絶妙のバランスのもとで

これには、作家シンが、現パキスタン領の村ハダリーで建設業の父のもとに生まれながらイングランドで教育を受け（第一八章）、インドにおいてヒンドゥー教徒でも、イスラム教徒でも、仏教徒でもなく、シーク教徒であり、ガンディーにも似てイングランドで法律を学びながら、依頼人のいない弁護士、外交官を経て小説家兼ジャーナリストに落ち着いたという、一見引き裂かれかねぬ立場を経験してきたにもかかわらず、セートやミストリーの採用したディアスポラ的手法、つまり舞台の外に身をおいて作中人物をあやつるといふ全知的話者的當事者性回避をせず、都市デリーを作品の主人公の娼婦にしてヒジュラの愛人になぞらえるほどに、自らをデリーの一部分であると意識したことが関係している。

シンは『デリー』執筆に二十五年の歳月を費やし、物語の骨子に

「血液と精液を注入した」（著者による注記）という。シンは作家としてもてるものすべて、つまり「愛、情欲、交接、憎悪、殺戮と復讐、並びに、暴力、そして何よりも涙」（普及版に対する前書き）を『デリー』に注ぎ込んだ。初期の作品『パキスタン行きの列車』から今世紀の秀作『水葬』にいたるまでシンの小説のいたるところに認められる要素だ。

カリブ海トリニダードに生まれ、インドをテーマに三冊まで紀行を書き、その二冊『インド…傷ついた文明』では、インディラ・ガンディーの戒厳令発令に急ぎ取材に駆けつけたものの、この期に及んでも自らのトリニダード経験を書き込まざるをえぬほどインドから隔たった作家V・S・ナイポール（一九三二—）が、その後のインディラ・ガンディー暗殺をめぐる作家シンのわずか数頁の描写の前にある意味でひとたまりもなく敗北した背景には、この当事者性の濃淡の差という問題が横たわっている。

遺跡訪問

『デリー』は、ヒジュラのバーグマティを愛人にもつこの都市のガイド役の主人公シンと、かれにガイドを求めてくる異邦人による、デリーの数々の遺跡訪問というかたちで進む。デリーはモダンとプレモダンの往還に格好の舞台、格好の空間だ。

シンは、ある時は、女王の従姉妹に対する時のように、オックスブリッジのアクセントを用い、自分が物見遊山の単なる付き添いではな

く歴史家であることを示しつつ対等以上の関係を確立し、ある時は、*「デリーには百以上の大使館、高等弁務官事務所、それに代表部があった。デリーの外交団にとって、やるべき仕事は殆どない」*と切り切つて、空いた時間をいかに埋めたかを赤裸々に語り（第三章）、ある時は、午前中に建物をひとつ見学すれば十分と言いつつ知人の米国人の娘に対する時のように、自分たちふたりの関係を自然の流れにまかせ、*「マハーバーラタ」*の「大海に浮かぶ二つの木片は、時として邂逅し、そして再び離別していく。この世に生存する創造物の結合も、これまた同じ」という言葉を引き、人生をはかる尺度の長さを披露する（第七章）。

作家シンは、主人公シンのガイドぶりを、相手が、いま、その一例を示した、異邦人たちであり、第九章に登場するタミール出身のカマールであれ、実に滑稽に描く。

歴史の挿入

作家シンは、主人公シンと作中の現実世界の女性たちとのいくつもの挿話の間に、歴史上の有名無名の人物たちの一人称による語りや手記を挿入してゆくが、その筆致は、女性たちを描く時の滑稽なそれとは対照的に、真摯この上ない。

この作品、*「オーランド」*を書いたヴァージニア・ウルフがもし読んだならば、地団太踏んで悔しがったかもしれない。現実には、そういうことは不可能だが、読者としては、*「オーランド」*を読み、そ

して『デリー』を読むということは可能だ。あるいは、ロンドンを描くディケンズの作品群を。その上で、シンのデリーのほうが勝つていくという感想に、以下の論考は基づいている。

そしてもうひとつ。この作品には、経験を積み、しかもかなり過酷な経験を積み高年齢に達した作家の作品ならではの独特の重みがある。読者の側から言えば、最初は作家の博識、都市の意味の充満にわれを忘れて読み進むものの、回を重ねるにつれ、理解が進み、しまいには息苦しくなる。でありながら、息苦しく感じ始めたそのときには、すでに『デリー』の渦中にあり、逃れることなどかないもせず、何度も個々の章をあたかも短編のように読み返すばかりとなる。

タイムールに「余の目的とするところは、邪教徒を真の宗教の道に導き、その国を多神教と偶像の穢れから浄化することにある」（第六章）と、アウラングゼーブに「一箇所の留まる水は腐敗し、動かない皇帝の権力はその手から滑り落ちる」（第十章）と、詩人ミール・ターキ・ミールに「愛と詩の双方が私を焼き尽くした」（第四章）と、さらにガンディーに反発しながらもその死を嘆く「僕」という無名の青年に「僕のバブーが死んだんだ」（第二十章）と言わせるとき、作家シンのこれらの人物に対する解釈には寸分のぶれもなく、そこにはただただかれらの本質を描きつくしたという作家としての満足感がただよふのみだ。

こうした傑物の登場するデリーの歴史の中では、それが一八五七年、一九四七年といった年代であっても、これら英印関係の節目で、作家シンはその役割をなんとか演じ切るイギリス人を舞台にのせることに

違和感をおぼえたのかも知れない。

少なくとも、作家シンは、「一八五七年」という章で、イギリスにあこがれる女性の姿をもつともぞんざいに描いた。作家シンがこの章に配した人物は、第一章の令夫人より、また第七章のアメリカの少女より小粒なアリス・オールドウエルという女性だった。カルカッタにいと英国人たちからアジア人の仲間とみなされることをたえず怖れ、父親ほど歳の離れた夫にデリー移住を説き、娘たちにいずれイギリスの教育を与えたいと願うアリスは、デリーでムガル帝国の終焉に立ち会う。夫はあっけなく死に、事件はアリスとその一家にとつて悲劇そのもののだが、作家シンにかかる滑稽感ばかりが増幅される。

一九四七年を扱うにあたって、マウントバッテンの影は薄い。読者はデリーを舞台とする小説の役者としてイギリス人は作家シンの眼中になかったと気づく。

門番ブード・シン

では、だが、そして、何が重要なのか。主人公シンは「人生において私が情熱を感じるものが二つある」と言う。「デリーとバグマティだ。この二人には二つの共通性がある。二人とも、実に面白い。そして、不毛である」(第三章)。こういう発想は「ディケンズとロンドン」といったテーマからは、どう逆立ちしても、出てこない。

『デリー』には落としてはならないもうひとりの人物がいる。これ

もシーク教徒で、主人公シンの住む地域の門番ブード・シンだ。シンはときどき問題を起す。第二章「バグマティ」は、バグマティがシンのアパートから、おそらくラール・クアンに帰宅したところから始まる。主人公シンは、警察からの電話に、警察署に向き、そこでブード・シンの犯罪行為について知らされる。ブード・シンがコンノート・ブレイスで女性の胸に触れたという。主人公シンは軍隊時代にブード・シンがトラックの運転をしており、トラックのクラクシヨンを鳴らしていると思いついて積明する。ブード・シンは釈放される。主人公シンが見捨てておけなかったのは、ブード・シンが主人公シンの名前を警察署で挙げたからだった。このわずか二頁の「バグマティ」の章は、これもまたバグマティが登場しないという点、また、いずれ最終章で悲劇の主人公となるブード・シンにかむエピソードの挿入という意味で重要だ。

さらに注目すべき点は、この章と次の第四章「ミール・ターキ・ミール」になんらつながりが見出せぬ点だ。導入を必要としないほどに、われわれは歴史上の人物たちに馴染み始めている。過去に向かうと断らずとも次の章で過去に向かうというからくりには読者がなれ始めているということだ。

作品冒頭から最後まで登場するのは主人公シン、バグマティ、そしてブード・シンだけだ。インド政府軍の黄金寺院襲撃、シーク教徒護衛官によるインディラ・ガンディー暗殺。作家シンはこの暗殺に対する報復の対象として死にゆくブード・シンの姿をもって事態の深刻さを示した。二人の少年がブード・シンの頭上に、燃え盛るタイヤ

を掲げ、ゆっくりと頭の周囲に、そして肩の下に降ろしていった。ブード・シンは、苦悩の中で叫び声を上げ、地面に崩れ落ちていった」(第二章)。「パキスタン行き列車」、「水葬」と同様、作家シンは、『デリー』をかくも劇的に閉じる。そして「一八五七年」をアンチクライマックス程度の扱いで済ませる。

同じく英語という他者の言語を用いながら、クシュワント・シンや、E・M・フォースターが序文を寄せている『不可触民バクハの一日』の著者ムルク・ラージ・アーナンドは、半世紀近く後に生まれた孫の年代のセートやミストリーより、イギリス近代小説の影響をはるかに希釈しながら、独自の小説世界を作り上げていた。肩すかしの奥にあったのは、英語で書かれていながら、ヨーロッパ近代小説世界とは異なる豊穡にして、こわく的な世界だ。どちらにより親近感を抱くか、それが読者の当事者性の度合い、他人事を我が事として読む想像力の有無の試金石となる。

『デリー』の章立て

『デリー』は、シンの他の小説同様、実に考え抜かれた構成をもっている。著者の言によれば二十五年間もこの作品のことを考えていたというが、決して誇張とは見えない。章題は「第一章 デリー」に始まり「第二章 バグマティ」に終わる。章題としての「バグマティ」は、全部で十あり、他の章題と交互に現れるというかたちになっている。「バグマティ」の章において作家は主人公シンの現在を語

り、他の章においてデリーの過去を語る。いや正確に言えば、デリーにかかわった過去の人物たちに過去を語らせる。

主要人物は主人公のシン、かれの愛人バグマティ、門番ブード・シン、そして章題にもなっているティムール、アウラングゼーブ、ミール・ターキ・ミールといった歴史上の人物たちだ。これに加えて、主として「バグマティ」と題された章のなかに入り込んでいる人物がいる。また、「一八五七年」、「建設者」、「奪われた者」に組み込まれた人物もいる。そうした人物もあわせ、ここで全二十一章の構成と作中人物たちを整理しておこう(表参照)。またシンの得意とする後に触れる劇的エンディングの妙についても一部簡単に触れておく。

作品は現代と過去とを往復するかたちで進む。作品の構造として、過去に向かうときの出発点として現代がある、ということをご確認ください。本稿は、一定の範囲内で、また本稿に続く複数の論考のなかで、『デリー』のモダンを、ひいてはクシュワント・シンのモダンを問うものでもあるからだ。

バグマティ

現代に住む女性たちから始めよう。まずは作品の最初から最後まで登場するバグマティ。主人公シンは道端に倒れていた女性バグマティを助け家に連れ帰る。門番ブード・シンの反対を押し切って、バグマティの出入りを許すようになる。バグマティは女性のヒジュラだ。主人公シンは冒頭で都市デリーとバグマティの共通点を挙げる。

章 (原文頁数)	章題	主要人物	宗教	劇的エンディング の妙
第一章 (12) シンのデリー到着の かたちは他の作中人物 の原型	デリー	シン 門番ブード・シン 珈琲館の客 運勢読みの男	シーク教	ニガムボード火葬 場の少女の火葬
第二章 (15)	J・H・T 令夫人	シン J・H・T 令夫人	キリスト教	J・H・T 令夫人の 帰英
第三章 (22) バーグマティとの馴 れ初め	バーグマティ	シン バーグマティ イルマ・ヴィスケルマ ン (西ドイツ大使館書 記官)		文字の彫られた石 の発見
第四章 (37)	ムサーディ・ラル [手記]	ムサーディ・ラル	シーク教	デリーこそ住まう べき場という認識
第五章 (8) ありふれた表現に含 まれる知恵を信じる バーグマティ	バーグマティ	シン バーグマティ		ティムールの『回 想録』導入
第六章 (8) ティムールの『回想 録』を主人公シンが 脚色の上、紹介	ティムール [手記]	ティムール	イスラム教	サマルカンドに帰 還
第七章 (20) 主人公シンの学識に 感銘を受けるバーグ マティ	バーグマティ	シン バーグマティ アメリカ人の娘ジョジー ヌ		禁欲という結末
第八章 (17)	不可触賤民 [手記]	ジャイター・ラングレ ータ	シーク教	砂嵐の助け
第九章 (7) 主人公シンがアウラ ングゼーブについて 語る前の出来事	バーグマティ	シン 准将の妻カマーラ・グ ブタ		気にかかっていた ことを終え、すぐ に歴史上の人物に 頭を切り替えるカ マーラ
第十章 (20)	ヒンドゥスタン皇 帝、アウラングゼー ブ・アラムギール [手記]	アウラングゼーブ ヒーラ・パーイ	イスラム教	アウラングゼーブ の死
第一一章 (4) 「バーグマティ」と 題する章が短くなっ ていく	バーグマティ	シン バーグマティ ブード・シン		悪夢のはての生け る者の世界の目覚 め

章 (原文頁数)	章題	主要人物	宗教	劇的エンディング の妙
第一二章 (25)	ナディール・シャー [手記]	ナディール・シャー (ペルシャから) ヌール・バーイ	イスラム教	ペルシャに帰還
第一三章 (2) 二人のシン	バーグマティ	シン ブード・シン		ブード・シンの保 釈
第一四章 (38)	ミール・ターキ・ ミール [手記]	ミール・ターキ・ミール 詩人マスード ライース・ミアン ライース・ミアンの妻 (サヒーバ) 新しい家庭教師	ヒンドゥー教	生ける屍となった デリー
第一五章 (4) 主人公シンの食事に 関する短い考察	バーグマティ	シン		放談の限界
第一六章 (77)	一八五七年 [三人の手記]	アリス・オールドウェル アレクサンダー・オー ルドウェル 皇帝バハドゥール・シャー 下級兵士ニハール・シ ン	シーク教	予想された夫の死
第一七章 (2) バーグマティからも デリーからも逃れら れぬ主人公シン	バーグマティ	シン バーグマティ		デリーにとどまる シン
第一八章 (31) 作家シンの父の面影	建設者 [手記]	サー・ソパー・シン		旧世代と新世代の 論争
第一九章 (2) デリーの常態的死を 語るバーグマティ	バーグマティ	シン バーグマティ		バーグマティの哲 学的言辭
第二十章 (26)	奪われた者 [手記]	ラーム・ラーカ ガンディー ネルー	ヒンドゥー教	はからずもガンディー の死を嘆くラーカ
第二一章 (17) シンを助けにくるバー グマティ	バーグマティ	シン バーグマティ インディラ・ガンディー ブード・シン		読者にもっとも身 近な人物の突然の 死

「余りに長期間にわたって、手荒な人々によって不当に虐げられてきたため、ふたりとも自分の誘惑的な魅力と、嫌悪感を抱かせるような仮面の下に隠しておくことを学んだのだ」(第二章)。

バーグマティも同様だ。彼女を知らない者にとっては、魅力などまったくない。彼女は色黒で、顔に痘痕。背は低くて、姿勢も悪い。齒は不並びで、噛み煙草とシガレットのために黄ばんでいる。着ているものはうるさいし、声は更にうるさい。話す言葉は下品で、礼儀など全く知らない。

だが、こうしたことは、私に言わせれば、表層的なことに過ぎない。(中略) 物事が異なる局面を見せるようになるために、しなげればならないことは、自分がデリーの一部になっているのだという所属感覚を養うこと、それにバーグマティのような誰かに愛着を感じるようになることである。(中略) 頭ではなく、心で見る。理性ではなくて、感情を使うのだ。(第二章)

つまり、文学的理解をもってして対象をとらえる。主人公シンは、人に対して、遺跡に対して、これを実践する。

「バーグマティ」の章

現実において現在を見る見る過去になる。小説においても変わりない。だから現在を小説でとらえようとしても、現在は作家の手からも

読者の手からもするりともれてしまう。そこで現在を現在形で描き、そこに過去形で描く過去を挿入する。

「デリー」の現在と過去はそのようにして区別され、現在に登場する中心人物が、作中人物のシン、バーグマティ、そして門番のブード・シンの三人ということになる。

面白いことに、この現在を描く章は第一章「デリー」と第二章「ホイティ・トイティ令夫人」を除き、第三章から第二章までの奇数章がすべて「バーグマティ」という章題になっている。

さらに興味深いのは、「バーグマティ」と題する章の長さが作品の進行につれ、短くなり、最後の第二章でまた一定の量にもどっているという点だ。「バーグマティ」の章は、現在の世界を構築している。その構築を終わるや、過去の章の頁数が増え始める。

確認しておきたいのは、現在から過去に向かう契機は何かという点だ。それは各章の絶妙のエンディングの味読によって理解可能となる。

デリーを離れぬ女性たち

小説というジャンルをもってしてはじめて捉えることが可能なこれら女性の作中人物たちのなかでも、バーグマティとヌール・バイイのふたりはデリーと分かちがたく結びついているという点で、この都市をめぐる考察に欠かせぬ存在だ。われわれはすでに作品第一章で主人公シンによるバーグマティとデリーをめぐる共通項に触れた。その後、バーグマティとデリーとの関係はどのようになっていくのであろうか。

そもそもバーグマティは女性のヒジユラだ。十五歳のとき彼女の属する集団の指導者がバーグマティを妻とした。そのバーグマティが主人公シンのもとを訪ねるようになったのはわけがある。繰り返しになるが、「人生において」（シンが）「情熱を感じるものが二つある。デリーとバーグマティだ。この二人には二つの共通点がある。二人とも、実に面白い。そして、不毛である」（第三章）。これは、この章で、バーグマティとの出会いの経緯を語るシンの言葉だ。

この章における現在時から遡ること三年前、主人公シンはある実業家の伝記を書いていた。「リッジ通り」で車を走らせていると、横たわっている人影を見つめる。「お願いですから、バス停まで乗っけて下さいませんか」との声にシンは何かの畏ではないかと用心する。

警察も病院もまずいと判断したシンは自宅に連れ休ませる。やがて目を覚ますと「あなた様の奴隷は十分に眠りましたわ」と美しい言葉で言う。「名前を知ってごつなされるの？ あなた様の奴隷はバーグマティと呼ばれていますわ」と名を告げるこの女性は「眠くなった時に居た場所がそのまま私の家」で、「そこにカーベットを敷き、家にする」という。「屋根は天空の星星で飾られていますわ」（第三章）。体力を取り戻すとバーグマティは「生きている限り、あなた様の奴隷になりますわ」と言い、そしてシンの家を離れる。以後、「デリー」のいくつもの「バーグマティ」の章に、この女性は、もうひとりの重要人物で門番のブード・シンと同様、繰り返し、繰り返し登場することになる。

「生きている限り」というのは本当であった。最後に会ったあと

（第一九章）、ずいぶんと姿を見せなかつたバーグマティは、シーク教徒護衛官によるインディラ・ガンディー暗殺に怒るヒンドゥー教徒の若者が、主人公シンの住む界限に入ったとき、そのことを聞きつけて駆けつけたのは、ほかならぬこのバーグマティであった。髪は少なくなり、ヘンナで染めている。歯がなく、口をもこもこさせている。

「シーク教徒の店、事務所、ホテルが略奪されている。あなた、このままここに居て、あの人たちに殺されようって言うの。ああ、あなたをラルル・クアンに連れて行ってあげる。あそこなら誰にも手出し出来ないわ。さあ行きましょう」（第二章）

シンは、バーグマティに「馬鹿」呼ばわりされ「理性」を取り戻すよう諭されても、家を去ろうとしない。そしてブード・シンの悲劇を目の当たりにする。

もうひとり、デリーを離れたがらぬ女性ヌール・バイイについては、その主人とあわせて別の稿のなかで触れるとする。

J・H・T令夫人

次に章題となっている女性に移ろう。「J・H・T令夫人」のJ・H・T令夫人だ。かの女はイギリス女王の従姉妹という設定で、インドには考古学者として遺跡の調査に訪れる。ひさしぶりにロンドンからデリーに戻った主人公シンは、飛行機に横付けされた大統領専用の

灰色のロールス・ロイスにこの夫人が乗るところを見る。翌朝、新聞に載った夫人の写真からその名を確認していると、友人の教育省次官から電話が入り、婦人の遺跡調査への同行を依頼される。車とキャビアとシャンパンがつく。ガイドと文筆が主人公シンの生活を支えている。ただし、集団を相手のガイドではなく、選りすぐりの人々を相手に、時にはオックスブリッジの発音を駆使し、相手を牽制しながらの、個人相手のガイドだ。J・H・T令夫人は「毛皮の繭の中から出現する。やっと全体の姿が分かった」（第二章）。「五十五歳くらい」で、「小柄」、「起伏にとほしく」、「女性らしくは見えない」（第二章）。婉曲に訳してもこつこつという具合で、原語ははるかに厳しい表現になっている。小説であればこそその表現と言えなくもない表現がさらに続く。「濁った金髪であり、痩せ型で褐色の身体は全身、濁った金色の体毛で覆われている。顎の脇に縫合の跡があるのは、美容整形をしたからであろう」（第二章）。と、どこか一点でさえも作家シンにほめてみようという姿勢がない。それでいて、主人公シンとJ・H・T令夫人の二人の言葉のやりとりには、若い男女の場合であればおそらく見られることはないであろう、独特の緊迫感がある。男も女も初老にあと少しで手のとどくところ。男は旧植民地の人。女は旧宗主国の人。まぎれもない支配階級の出。男はあまりある歴史都市デリーを舞台背景にあまりある教養を披瀝する。女はそれを前に一歩も引かない。男は『ギータ』を持ち出す。女は頷いた。

「それって『マハーバーラタ』にあるお話ね？ 正義の戦いについて

のクリシュナの教えといった……。物語のどこかに夫を何人ももつた妻の話がなかったかしら？」

「ドラウパティですよ！ パンダーヴァ族の五人の兄弟全部と結婚した女性です。三男のアルジュンが弓の競技で勝って彼女を仕留めた。アルジュンが彼女を連れて家に帰り、「母さん、どう？ 僕の仕留めたものを見てよ！」と言つと、母親は見ないで答えた。「いい子だから兄弟皆で仲良くわけののですよ。すると、母親に従順なインド人であるアルジュンは、言われたとおりにしたというお話です」（第二章）

J・H・T令夫人はしだいに主人公シンをからかい始める。説明上、猥雑な言葉を発せざるを得ない状況に主人公シンを追い込みさえする。あたりのものたちの発する言葉をシンに訳してくれと頼み、それをおぼろげとシンが訳すと、急に話の程度を引き上げ、シンを煙にまぐ。言葉のみならず態度でもシンはからかわれればなしで、うるたえていると、「機嫌を悪くしないでね。私つて、少し殿方をからかう癖があるのよ」と助け舟をだされたりする。そんな一人が、一瞬、神妙になつたところで、夫人の向かえの大統領専用のロールス・ロイスが到着し、二人を前哨灯で照らし出す。ある種のアンチクライマックスで章を終えるところも、作家シンなりのクライマックス設定と言えなくもない。J・H・T令夫人は、車のなか、再び令夫人となり、冷淡で周囲を睥睨するような目つきにもどる。「本当にありがとう。ロンドンにいらしたら、寄ってくださいね」（第二章）。

「デリー」の出る三十年近くも前、トリニダード出身のインド系作家V・S・ナイポールが『模倣者たち』でステラを通して描きたかつたのも、こうした、まったく異なるふたつの姿勢であったのかも知れない。過剰な接近の許容と冷淡な拒絶という二面性だ。

「バークマティ」の章の脇役

「バークマティ」という複数の章には何人も個性的な女性たちが隠れている。

J・H・T令夫人に次いで主人公シンは西ドイツ大使館書記官イルマ・ヴィスケルマンのガイドをする。「年齢は三十代、灰色の目、唇は薄く、背が高く痩せ型だ。髪を束にして後ろに留めており、その故に少しきつい感じを与えていた」(第三章)。「レッド・フォート」に案内し、「モティ・モハール」で夕食をともにする。イルマがシンの家を訪れる。と、突然、二ヶ月ぶりにバークマティが来て、イルマは立腹、「ミスター・シン、お会い出来て、良かったわ。じゃ、さよなら。ゆっくり楽しむといいわ」(第三章)と言い残して出て行く。これも作家シン一流のアンチクライマックスだ。

次のガイドの相手はアメリカ人の娘ジョジアヌ。シンの知人のカーライル夫人の姪で、歳は十六歳。シンが遺跡と人間とどちらに関心があるかと問うと、「そんなことわからないわ」(第七章)と投げやりな返事をする。単語から「グ」の音を落とし「コーイン」、「カミン」、「ゲリン」、「シーイン」と発音する。「レッド・フォート」から「ロイ

ヤル・モスク」に移動しようとする。「いいえ、毎日、午前中には建物ひとつだけよ。わかった」(第七章)と言う。アメリカ人の娘と東洋人のガイドとの会話は、おそらくこんなものであるう、と読者に思わせるところがいかにも作家シンの老練なところだ。ありふれているようでいて、決して月並みな描写にしてしまわない。主人公シンが『マハーバーラタ』の「大海に浮かぶ二つの木片は、時として邂逅し、そして再び離別していく。この世に生存する創造物の結合も、これまた同じ」(第七章)という言葉を引くのは、この年端も行かぬ娘との別れの後のことだ。

こうして主人公シンは何人も異邦人相手に次々とデリーの遺跡を紹介していく。「レッド・フォート」、「クトウヴ・ミナル」、「ロイヤル・モスク」、「カスリッパザール・ストーン」、「ハズラート・ニザムディーン・アウリヤの廟」、「デリー門」、「ラージ・ガート」、「リッジ」、「ピルラ・ハウス」、「フマユーン廟」、「メフロリー」という具合に。それはそのまま作家シンによる読者に対してのデリー紹介でもある。

チャールズ・ディケンズの『ピクウィック・クラブ』にアルフレッド・ジングルという旅芸人が登場し、世間知に乏しいピクウィック氏一行に案内役をかってでるが、そこに登場するロンドンの建物のわずかなことを確認するにつけても、作家シンのデリー案内の複雑なからくりの妙に圧倒される。それがシンとディケンズの手法の差に起因するのか、デリーとロンドンの差に起因するのかは、にわかには決めがたい。

ひとつと言えることは、ディケンズの関心がディケンズの当時における現代のロンドンにあったという点で、ここがデリーに対するシンの関心と少なからず異なるところだ。

また、ディケンズよりやや年下の作家ジョージ・エリオットにしても、地方都市の俯瞰という観点からは、ブロンテ姉妹やエリザベス・ギヤスケルよりも空間を意識した作家だが、その空間、具体的にはイングランド、コヴェントリーをモデルとしてのミドルマーチは、作家の生きた年代の一世代前という過去に設定されているものの、シンのように数百年にわたり現在と過去を往還するというほどのものではない。

「バーグマティ」と題する章に登場する最後の女性は准将の妻カマール・グプタ。主人公シンは普段、図書館で本や雑誌をめぐっているが、今日はある人とここで落ち合うことになっている。「これから会う女性には十五歳なのか、それとも五十歳なのか、太っているのか、痩せているのか、色は白いのか、黒いのか。何のために私に会いたがっているのか」(第九章)と落ち着かないシン。カマールは「モダーン・スクール」を出て「聖ステイヴンズ大学」を卒業。そこで夫と知り合い「駆け落ち」し、三人の子供がいる。夫はヒンドゥー語、カマールはタミール語、二人の会話は英語、子供たちは三つとも話す。カマールの望みはこうだ。「あなたが私にまだ見たことのないものを教えてくださって、私をご覧になっていないものをお見せするというのは、どうかしら？」(第三章)。主人公シンは、カマールに、そして読者に、皇帝アウラングゼーブの生涯を垣間見せる。

「バーグマティ」の章のバーグマティ不在

ここで、「バーグマティ」の章の長さという点、そこにバーグマティが登場するのかがという点、さらに「バーグマティ」の章がその次の章にどのようにつながっているのか、あるいはいないのかという点について確認しておこう。

奇数章は第一章「デリー」(長さ十二頁)をのぞき、すべて「バーグマティ」と題されている。「デリー」も作中人物シンがデリーとバーグマティの共通項を指摘している点で「バーグマティ」の章と言つことができ。第一章の時間は現在だ。

第二章(長さ十五頁)も現在だが、ここで作中人物シンの基本的な生活パターンが紹介される。インド国際クラブ、珈琲館、重要人物への遺跡案内、執筆。

第三章「バーグマティ」(長さ二十二頁)は作中人物シンとバーグマティの馴れ初めなので、比較的長い。章の終わり、二人は次のムサーディ・ラルにゆかりの地をおとずれる。つまり、ある土地への訪問によって、その土地にかかわる人物への導入をはかっている。

第五章「バーグマティ」(長さ八頁)は第三章の半分以下で、作家シンの力点が歴史上の人物の手記に移っていることをうかがわせる。ただし章の末尾には、シンの現実世界とティムールの世界を結びつける表現がある。

第七章「バーグマティ」(長さ二十頁)はジョージヌとバーグマ

ティが登場する分、少し長くなっている。

第九章は「バーグマティ」（長さ七頁）と題されているものの、バーグマティが登場しない。頁数も前の第五章の半分以下になっている。作中人物シンはバーグマティに何週間も会っていないし、さらに「悪いことに」、バーグマティのことを考えることすらなくなっている。シンは遺跡を紹介するテレビの仕事に忙殺されていた。カマーラの提案は、互いに知らぬデリーを相手に教えようというものだ。取引が成立する。第一回目の見学は、シンがカマーラにシンの知るデリーを紹介する。この見学で、次の章の主人公となるアウラングゼーブの名を持ち出すのはカマーラのほうだ。第二回目の見学は、カマーラがシンにカマーラの知るデリーを紹介する。その中にはバーグマティの住むラール・クアンも含まれていて、シンは一瞬たじろぐ。三度目の見学は十月のある暖かい日となった。二人はカマーラのアパートに向かう。二人の頭のなかにあつたことが済み、カマーラはこれでアウラングゼーブの話してもらえるとシンに言う。次の章は、シンの語りではなく、アウラングゼーブ自らの語りとなる。

第九章はバーグマティが登場しない「バーグマティ」という章であること、これまでの「バーグマティ」と題する章に比べて、急に半分以下の頁数となっていること、バーグマティ以外の女性が登場し、シンとの顛末がアメリカ人女性やドイツ人女性の場合と異なっていることなど、これまでの「バーグマティ」の章とも、これ以降の「バーグマティ」の章ともおもむきを異にしている。

第一章「バーグマティ」（長さ四頁）にもバーグマティは登場し

ない。頁数も四頁と第七章の半分になる。

第三章「バーグマティ」（長さ二頁）の主人公は警察につかまつたブード・シンで、バーグマティは出てこない。

第五章「バーグマティ」（長さ四頁）の放屁論にもバーグマティは登場しない。

第七章「バーグマティ」（長さ二頁）でやっとバーグマティが作中人物シンとともに登場する。ふたりとも老いている。シンはバーグマティにマツサージを求める。

第九章「バーグマティ」（長さ二頁）のマンガ論にもバーグマティは出てこない。

バーグマティのバーグマティたるゆえんは、第二章「バーグマティ」（長さ十七頁）のかの女の振る舞い様であるう。バーグマティがシンを助けにくる場面だ。

ミール・ターキ・ミール

ティムール、アウラングゼーブ、ナディール・シャールの手記が、どれもその姿勢にふれのないものであつたのに対し、アーグラ生まれの詩人ミール・ターキ・ミールの手記は終始ふれにふれる。「詩と恋の双方が私「ミール」を焼き尽くした」（第一四章）というミールは父の残した唯一の遺産である文字を糧とし、詩を書き、ある日の朗読会で、著名な詩人マスードの鼻をあかす。その力は人の知るところとなる。熱狂的支持者のなかにライイス・ミアンの妻サヒーバもいた。サ

ヒーバはミールに息子の家庭教師の仕事を与え、そばにおく。これが初めてのことではないという町の噂にミールは耳を貸さない。ミール至福ののち、やがてサヒーバはミールに妻をあてがう。ミールはサヒーバの夫のついででデリーでも名を成す。さて、アーグラに戻ってみると、別の男が家庭教師として雇われている。自分、夫、新しい家庭教師を前に何食わぬ顔のサヒーバにミールは怒りをおさえるのに必死の思いだ。と、そのわりに、ミールは長命であった。アーグラ、デリー、その他の場を移動しつつ、詩作に思索を重ね、結局、生涯、サヒーバの「不実」を嘆くこの詩人の手記の挿入。

作家シンの真摯な詩心ともとれるし、戦乱と略奪の間のレリーフともとれる。作家シンは、ミールの詩に、現実遊離のきわみを見たのか、これに続く「バークマティ」と題する第一章で、人生の三大快楽として「性、フケでいっぱいになった頭皮に擦り込まれる油、満足のいく放屁」を挙げ、露悪趣味ぎりぎりの「放屁」論を展開し、ミールの狂恋とのバランスをとる。そして「一八五七年」に至る。

アリス・オールドウエル

本稿冒頭で用いた「イングリッシュユネス」という言葉の意味が、状況によっては実に皮肉に聞こえかねぬことを、「一八五七年」という章以上に示している箇所は、『デリー』のほかの章にはない。この章の語り手の一人アリス・オールドウエルはカルカタ（コルカタ）に住み、夫となる人を探す娘だが、夫は「英国紳士」でなければなら

ない。その夫と一刻もはやく英国に帰るのが夢だ。アリスは十八のとき、「郵便電信局」につとめる五十に届こうという「英国紳士」と結婚し、二人の娘を産む。昼となく夜となく、デリーへの移住を夫にうながす。カルカタには「アジア人」が多く、これでは英国紳士淑女たちから「アジア人の仲間」と見られてしまう。夫は五十五で退職するとアリスは夫の上司で四十の独身者ジョージ・アトキンズに近づき、夫のデリーでの職の斡旋を誓わせる。契約は成立した。アリス曰く、アトキンズは「龍を初めて殺したばかりの聖ジョージ」のようであり、「給料が倍増し、クリケットに大勝ちしたような顔」になった（第一章）。アトキンズにインド的と指摘されるとアリスは不機嫌になる。アリス唯一の心配は、アトキンズが自分をカルカタに引きとどめておきたがるかもしれぬということだったが、それも解決し、一八五六年、一家はデリーに移る。十一月、アトキンズとの子供ジョージナが生まれ、デリー名士を招いての祝いの集会も開く。パーティーやら社交やらで、アリスのデリー生活は軽薄に過ぎて行く。そして一八五七年となる。アリスと娘たち、そして夫は別々に逃げる段取りを整える。アリスは国王の孫でつてのあるミルザ・アブドゥッラーの屋敷に行き、妻にかくまってもらう。夫ミルザ・アブドゥッラーはさらに安全な場所をと、別の場所にアリスたちを移す。行ってみるとそこはミルザ・アブドゥッラーの秘密の隠れ家で、アリスはすべてを悟る。ヒジュラが現れ、アリスの身を清め、ミルザ・アブドゥッラーとその仲間二人に引き渡す。

アリスはかつてのパーティーの客たちに手紙を書くが、だれも助

けてはくれない。拳句、一部の手紙がミルザ・アブドゥッラーに抜き取られていたこともわかり、結局、牢獄に送り込まれる。そこには、多数のイギリス人たちがいた。名前をアイーシャ・バーノ・ベガムと変え、イスラム教徒に改宗していたアリスとその娘三人を除き、夫も他のイギリス人も銃殺される。

アリスは安堵する。これで夫の年金を申請し、自分の過去をだれも知らぬイギリスで暮らすことができる。

クシュワント・シンの大きさ、『デリー』の大きさ

『デリー』論に取り掛かり始めたとき、迂闊にも、この作品をわずか四千字程度で語りつくせるものと考えていた。その目算でしたためたのが、本稿、「一八五七年」から「ブード・シン」あたりまでの文章だが、書き終えて、また作品を読み返すうちに、ほとんど何も語っていないことに気付いた。

『デリー』には、都市、遺跡、廢墟、靈廟、バザール、カフェ、図書館、家、川、主人公たちの訪問地といったさまざまな場、ラール・クアン、ビルラ・ハウス、タージ・マハル、フマユーン廟、レッド・フォート、クトゥブ・ミナール、コンノート・プレイスといった具体的な場、アーグラ、サマルカンド、カイバル峠、デリー、ペルシャといった具体的な地名、ジャーナリズム、ガイド、手記、手紙、雑誌、語り、引用、金言、詩、小説への言及の欠如といった言葉にかかわることから、インディラ・ガンディー、ネルー、ガンディー、ティムー

ルといった実在の人名、バークマティ、ブード・シンといった架空の人名、飛行機、車、ラジオといった近代の指標としてのもの、アメリカ人、イギリス人、ドイツ人、ペルシャ人といった外国人、生と死、性、貧困、富、結婚、家系、少年、父と息子、主人と奴隷、宗教、政治、戦争、移動、侵攻といった普遍的テーマ、さらに砂嵐、グル、残忍さ、駆け引き、笑いなど、どうともおさまらぬものなどが、ところ狭しと溢れている。これをわずかの字数で論じるなど無謀のこのうえない。

そこで、先の四千字に何度かの加筆を試みるうちに、まずは女性作中人物について語り、続いて男性作中人物について語り、一段落したところで、今、羅列した言葉に関連するテーマに入ってゆくのがよいと考えるようになった。『デリー』という作品には、そうした行きつ戻りつのアプローチこそふさわしい。

本稿は『デリー』で筆者の目を引いた女性たちについての考察だが、話のゆきがり上、男性が挿入されている場合もある。反対に上記各テーマを扱う際に、ここで取り上げた女性たちを含め、多くの女性に再登場してもらつ必要もまたあろう。

註

- (一) Krushwant Sigh, Delhi, a Novel, 1989, Penguin Books India, 1990. クシュワント・シン(結城雅秀訳)『首都デリー』、勉強出版、二〇〇八年。本稿の固有名詞表記は本書に従った。引用も結城訳による。
- (二) Rohinton Mistry, A Fine Balance, Faber and Faber, 1995. Vikram Seth, A Suitable Boy, London: Phenix House, 1993.

参考文献

- 浅田実 『イギリス東インド会社とインド成り金』、ミネルヴァ書房、二〇〇一年。
- 浅原昌明 『インド細密画への招待』、PHP研究所、二〇〇八年。
- 厚東洋輔 『モダニティの社会学』、ミネルヴァ書房、二〇〇六年。
- 荒松雄 『インドの「奴隷王朝」』、未来社、二〇〇六年。
- 『多摩都市デリー』、中央公論社、一九九三年。
- 『インド イスラム遺蹟研究』、未来社、一九九七年。
- アンダーソン、ペリー 『ポストモダニティの起源』、こぶし書房、二〇〇二年。
- 飯塚キヨ 『植民都市の空間形成』、大明堂、一九八五年。
- イーグルトン、テリー 『ポストモダニズムの幻想』、大月書店、一九八八年。
- 石田保昭 『ムガル帝国とアクバル帝』、清水書院、一九八四年。
- 『ムガル帝国』、吉川弘文館、一九六五年。
- 今田秀作 『バクス・ブリタニカと植民地インド』、京都大学学術出版会、二〇〇〇年。
- 今村仁司 『近代性の構造』、講談社、一九九四年。
- ヴァーツヤヤナ(岸本裕訳) 『カーマ・ストラ』、平凡社、一九九八年。
- ウィリアムズ、エリック 『帝国主義と知識人』(一九六六)、岩波書店、『コロンブスからカストロまで』(一九七〇)、岩波書店、一九七八年。
- 辛島昇他監修 『南アジアを知る事典』、平凡社、一九九二年。
- 川崎淳之助 『チムール・シルクロードの王者』、朝日新聞社、一九七九年。
- ギデンズ、アンソニー 『近代とはいかなる時代か?』、而立書房、一九九三年。
- 木幡淳一編著 『大英帝国と帝国意識 支配の深層を探る』、ミネルヴァ書房、一九九八年。
- 金原左門 『近代化』論の転回(歴史叙述)、中央大学出版部、二〇〇〇年。
- グギ・ワ・ジオンゴ 『精神の非植民地化』、第三書館、一九八七年。
- サアデー(蒲生礼一訳) 『薔薇園』、平凡社、一九六四年。
- 齋藤昭俊 『近代インドの宗教運動』、吉川弘文館、一九八二年。
- 斎藤吉史 『インドの現代思潮』、朝日新聞社、一九八〇年。
- 坂井秀夫 『イギリス・インド統治終焉史』、創文社、一九八八年。
- ジェイムスン、フレドリック 『近代(モダン)という不思議』、こぶし書房、二〇〇五年。
- 『カルチュラル・ターン』、作品社、二〇〇六年。
- スピヴァック、ガヤトリ 『文化としての他者』、鈴木聡他訳、紀伊国屋書店、一九九〇年。
- 『ポスト植民地主義の思想』、清水和子・崎谷若菜訳、彩流社、一九九二年。
- 『断片を演じる・アイデンティティの話』、小野俊太郎訳、『みず』一九九三年七月・十月号。
- 『現代思想』一九九九年七月号、特集スピヴァック、サバルタンとは誰か、青土社。
- 『ポストコロニアル理性批判』、月曜社、二〇〇三年。
- スレーリ、サーラ 『修辞の政治学——植民地インドの表象をめくって』、平凡社、二〇〇〇年。
- ダルリンブル、ウィリアム 『精霊の街デリー』、凱風社、一九九六年。
- チシュティー、N・A(麻田豊監訳) 『パンジャーブ生活文化誌』、平凡社、二〇〇二年。
- デサイ、アニター(高橋明訳) 『デリーの詩人、めこん』、一九九九年。
- デュボア、J・A(重松伸司訳注) 『カーストの民』、平凡社、二〇〇八年。
- 富永健一 『近代化の理論』、講談社学術文庫、一九九六年。
- トムリンソン、ジョン 『文化帝国主義』、青土社、一九九三年。
- ナイポール、V・S(永川玲二・大工原彌太郎訳) 『神祕の指圧師』、草思社、二〇〇二年。
- (安引宏・大工原彌太郎訳) 『インド…闇の領域』、『インド…光と風』、人文書院、一九八五年、二〇〇二年。
- (工藤昭雄訳) 『インド…傷ついた文明』、岩波書店、一九七八年。

- 二〇〇二年。
 ——(工藤昭雄訳)『イスラム紀行』、TBSブリタニカ、一九八三年、岩波書店、二〇〇二年。
 ——(武藤友治訳)『インド・新しい顔』、サイマル出版会、一九九七年。岩波書店、二〇〇二年。
 ——(斎藤兆司訳)『イスラム再訪』、岩波書店、二〇〇一年。
 長崎暢子 『インド大反乱一八五七年』、中公新書、一八八一年。
 中里成章 『インドのヒンドゥーとムスリム』、山川出版社、二〇〇八年。
 那谷敏郎 『インドの黄金寺院』、平凡社、一九八一年。
 ニコルソン、R・B (中村広治郎訳) 『イスラムの神秘主義』、平凡社、一九九六年。
 ネグリ、アントニオ+マイケル・ハート 『帝国』、以文社、二〇〇三年。
 パス、オクタビオ 『インドの薄明』、土曜美術社、二〇〇〇年。
 ハーフィズ 『ハーフィズ詩集』(黒柳恒男訳)、平凡社、二〇〇三年。
 布施修司 『ムガル都市』、京都大学出版会、二〇〇八年。
 深見菜緒子 『イスラーム建築の見かた』、東京堂出版、二〇〇三年。
 濱田正美 『中央アジアのイスラーム』、山川出版社、二〇〇八年。
 ブラックバーン、ロビン (藤井聡・都築方明訳) 『インド亜大陸の階級闘争』、柘植書房、一九七七年。
 ベントウネス、シャイフ・ハーレド (中村廣治郎訳) 『スーフィズム』、岩波書店、二〇〇七年。
 ボイヤーズ、ロバート 『暴虐と忘却 一九四五年以降の政治小説』 田部井幸次/田部井世志子訳、法政大学出版会、一九九七年。
 保坂俊司 『シク教の教えと文化』、平河出版社、一九九二年。
 堀田善衛 『インドで考えたこと』、岩波書店、一九八〇年。
 バーバ、ホミ 『ポストコロニアルとポストモダン』 谷真澄訳、批評空間、一九九五年三月号。
 —— 『表象と植民地テクスト』 大橋洋一・照屋由佳(抄訳)、『越境する世界文学』、河出書房新社、一九九二年。
- 『差異、差別、植民地主義の言説』 上岡信雄訳、『現代思想』、一九九二年十月号。
 『奇蹟のしるし』 本橋哲也訳、『現代思想』 一九九八年四月号、青土社、二四八—二七〇頁。
 —— 『国民の散種 時間、語り、そして近代国家の周縁』 『国家と語り』 大野真訳、『批評空間』 一九九三年第九号。
 —— 『文化の中間者』 林完枝訳、ホール、ゲイ編 『カルチユラル・アイデンティティの諸問題』、宇波彰監訳、大村書店。
 マイアソン、ジョージ 『エコロジーとポストモダンの終焉』、岩波書店、二〇〇七年。
 松本睦樹 『イギリスのインド統治』、阿牛社、一九九六年。
 三浦雅士 『小説という植民地』、福武書店、一九九二年。
 ミッチェル、ジョージ (神谷武夫訳) 『ヒンドゥ教の建築』、鹿島出版会、一九九三年。
 宮治昭 『インド美術史』、吉川弘文館、一九八一年。
 ミール(松本耕光訳) 『ミール狂恋詩集』、平凡社、一九九六年。
 メジャフ、R 『ラテン・アメリカと奴隷制』 岩波現代選書、一九七八年。
 メンミ、アルベール 『植民地 その心理的風土』、三一書房、一九七八年。
 森本達雄 『インド独立史』、中央公論社、一九七九年。
 —— 『ヒンドゥ教』、中央公論新社、二〇〇三年。
 ルヌー、マリシモヌ(黒沢一晃訳) 『インド亜大陸の経済』、白水社、一九七五年。
 ルヌー、ルイ(渡辺重朗訳) 『インドの文学』、白水社、一九九六年。
 蠟山芳郎 『インド・パキスタン現代史』、岩波書店、一九七七年。
 山下博司 『ヒンドゥ教』、講談社、二〇〇四年。
 山田篤 『ムガル美術の旅』、朝日新聞社、一九七七年。
 吉岡昭彦 『インドとイギリス』、岩波書店、一九八〇年。
 渡辺建夫 『タージ・マハル物語』、朝日新聞社、一九八八年。
 Cudjoe, Selwyn. V. S. Naipaul: A Materialist Reading, Amherst, 1988.

- Jarvis, Kelvin. V. S. Naipaul: A Selective Bibliography with Annotations, 1957-1987, London, 1989.
- Naipaul, V. S. An Area of Darkness. London: Andre Deutsch, 1964. Rept. Harmondsworth: Penguin, 1968. 安引宏・大工原彌太郎訳『インド：闇の領域』『インド：光と風』人文書院、一九八五年、二〇〇一年。
- _____, India: A Wounded Civilization. New York: Knopf, 1977. Rept. Harmondsworth: Penguin, 1979. 上藤昭雄訳『インド：傷ついた文明』筑波書店、一九七八年、二〇〇一年。
- _____, India: A Million Mutinies Now. London: Heinemann, 1990. 笹友治訳『インド：新ごころ』サトル社版会、一九九七年。筑波書店、二〇〇一年。
- Mistry, Rohinton. A Fine Balance. Faber and Faber, 1995.
- _____, Such A Long Journey, Faber and Faber. 小川高義訳『かへり来た旅』文芸春秋社、一九九七年。
- Singh, Khushwant, Burial At Sea, Viking, 2004.
- _____, Delhi, a Novel, 1989, Penguin Books India, 1990. インド・シン (経城雅彦訳)『都議トノー』勉誠出版、二〇〇八年。
- _____, Not A Nice Man To Know, Penguin Books India, Penguin Books, 1993.
- _____, The Company of Women, Viking, 1999.
- _____, Train To Pakistan, 1956, Grove Press, 1981.
- _____, I Shall Not Hear The Nightingale, Penguin Books, 2004.
- Seth, Vikram. The Golden Gate, London: Faber and Faber, 1986.
- _____, A Suitable Boy, London: Phenix House, 1993.
- _____, An Equal Music, Phoenix, 1998.
- Theroux, Paul. Sir Vidias Shadow, London, 1998.
- Viswanathan, G. Masks of Conquest: Literary Study and British Rule in India, London: Faber and Faber, 1990.